

もし火の世話をしているなら、何のこともなく予備の油を持っていたでしょう。油の量や、芯の調節や手入れが必要でした。持ったなかった方も、舞い上がって持ってくるのを忘れただけかもしれません。

さて、この「賢い」という言葉は、岩の上に建物を建てたもの(七・二四)について、二四章四五節では時間通りに食事を用意させる忠実な僕を指しています。岩の上に建物を建てるものは御言葉を基礎にする着実な生き方です。時間通りの食事は、日頃のことになります。この賢さは、地味な賢さです、機転の利くような、頭の良さが見えるようなものではないかもしれません。よく考えられ、忍耐強いものです。見えるところではなく、見えない土台を選ぶ賢さです。そして、終わりの時の賢さは主人に仕えること、それは花婿を待つ希望に支えられています。どちらも来るべき方のため賢さです。

わたしたちにとって終わりの日の備えは、主の日に向かう方にあります。教会は主の日のものとして礼拝を守ってきました。いつ来るか分からないその時を先取りして、その恵みを知ることのできる時になっています。主が再臨されて、わたしたちと共におられることを臨在と言います。聖餐式の時には聖霊が主の臨在を確かめてくださることを確認します。聖餐に与り、ここに主が共におられることを確かめることができます。わたしたちが目指している主の日は、わたしたちの礼拝に表されているのです。礼拝は終わりの時に仕えるものです。喜劇王のチャップリンは一

番良い作品はと聞かれたとき、次の一本だと言っていたそうです。しかし、礼拝は違いません。この礼拝が最後となるかも知れないのです。同時に昔の礼拝は良かったということも必要ないことです。

そして、主御自身も御自分の死を前にして語られています。目の前には十字架の死があります。十字架に向き合って、弟子たちに語っています。それはこのたとえが私たちに与っては自分たちの終わりの時の備えになることを示しています。

信仰者の終わりの時に、そこに空しい絶望の暗闇が待っているのではないことを示しています。その暗闇は一つの声を待っています。「花婿だ、迎えに出なさい」という声です。信仰者はたとえ眠りかけていても、目を覚まして、小さな明かりをともし、出迎える備えを持つている。これはわたしたちが生きている時も、死にあつても変わらない希望です。それがわたしたちの賢さです。生きている時だけの賢さとは違う賢さです。

礼拝に生き、たとえそれが叶わなくなったとしても、祈りと礼拝の心をもっていることこそ信仰者の賢さです。

詩編一九・一〇五に「あなたの御言葉は、わたしの道の光 わたしの歩みを照らす灯。」と記されています。

御言葉を光として、御言葉を灯とすること、それが自分の道だと語ります。これは、信仰者のともし火の油がここにあることを教えるものです。

わたしたちは、小賢しい世の賢さ、世の知

恵に生きるのではありません。それは生きる間はいくらか役に立つように見えます。しかし、死に対しては何の力もないのです。

主イエスは、死の闇を貫くものを与えてくださっているのです。わたしたちはむしろ素朴に、素直に御言葉に生きることを恵みとして受け取ることができます。わたしたちにはともし火である御言葉、つまりイエス・キリストの福音による救いが与えられました。そして、これをともし続ける油となる生活もたらされました。わたしたちには礼拝の生活、祈りの生活が与えられました。それは賢さは程遠い、素朴で愚直な歩みです。しかし、それはわたしたちの主を迎えられるように、与えられたものです。大切にされなければなりません。(九月二日 公同礼拝)

八月講壇一覧

第一主日(八月四日) 公同礼拝

「偽善者の救い」 高橋和人牧師

エレミヤ 一三・一五〜一七

マタイ 二三・一三〜三九

第二主日(八月一日) 公同礼拝

「耐え忍ぶ時」 高橋和人牧師

イザヤ 八・九〜一五

マタイ 二四・一〜一四

第三主日(八月八日) 公同礼拝

「滅びを逃れて」 高橋和人牧師

ダニエル 一二・九〜一三

マタイ 二四・一五〜三一